



白いテーブルクロスをかけ、ぬいぐるみなどでかわいらしく飾った部屋で話を聞く。性教育のミニ冊子は「社会に出るともう誰も教えてくれないだろう知識が少しでも伝われば」と木原さん(京都府内)

授業プログラムを心の泉に

伝えたい、性と暴力

「支援者」

「卒業したらどうしよう。先のこと何も決まってるないし、めっちゃ不安。リストラされたみたい」「とりあえず夜の仕事を続けようかな」

ある日の放課後、府内の高校で卒業を控えた生徒たちが語り合っていた。聞き役は京都大准教授の木原雅子さん(62)だ。「そうなんだ」と相づちをうちながら話に聞き入っている。

社会学者としてこれまで数々の若者にインタビューをしてきた経験から、木原さんは「今、性行動の活発な子と、そうでない子が二極化している」と指摘する。性感染症やエイズウイルス(HIV)感染、思いがけない妊娠などを恐れながらも危険な性行動を続ける子も少なくない。

木原さんが出会ってきた子のなかには、恋人からドメスティックバイオレンス(DV)を受けている子もいた。性行為の瞬間だけ、自分が生きていて、必要とされていると感じられる」と話す子もいた。「自分の性も相手の性も大切にしながら生きてほしい」。心からそう願う。

木原さんは、子どもたちの自尊心を引き出しつつ、性やいじめといった問題に立ち向かうための授業プログラム「WYSH」(Wellbeing of Youth in Social Happiness)若者の真の幸福を2002年に開発した。アンケートと密度の濃いインタ

厳しさ抱えた生徒と語り合う

ビューを組み合わせて独自に作り上げた授業プログラムで、全国の中学や高校、特別支援学校などで実施している。高校でのインタビューもその一環だ。

プログラムの内容は学校の状況に合わせて個別に開発しており、この15年間で授業を受けた児童や生徒は25万人にのぼる。「誰にも、性暴力の加害者にも被害者にもなってもらいたくない。私の授業は子どもたちの『心の泉』を引っ張り出す時間です」と木原さん。

インタビューを通して出会った子どもたちは、経済的に苦しい家庭に育ってきたり、ネグレクト(育児の放棄)に近い状態だったり、困難な状況で生きる子が多い。この日の高校での

インタビューに参加した生徒も、一人親家庭が多く、自分がアルバイトをしなれば家族の生活が成り立たないなど、それぞれに厳しさを抱える。

そんな生徒たちに木原さんが配ったのが「若者のみなさんへ」と書かれた手のひらサイズの冊子だ。開くと「10代の女性にとって妊娠と性感染症はどちらが身近なの?」「どんな人が性感染症にかかりやすいの?」「といった質問が書かれ、全員が食い入るように見つめていた。

医学博士でもある木原さんは、生徒たちの質問にひ

としきり答えたあと、「皆さんはともかわいしい、いろんな人から声をかけられると思う。でも、自分を本当に大切にしてくれる人かどうかを見極めてね」とい

続 絵 はがきに見る大日本帝国

日清戦争で勝利した翌年となる1896(明治29)年12月3日、川西財閥を創業した川西清兵衛を中心に、神戸の有力実業家ら27人が発起人となり、日本毛織株式会社(現在のニッゲ)を設立した。戦勝ブームに加えて、日本とオーストラ

軍需取り込み事業拡大



⑬ 加古川の毛織業

ラップナウ・コレクションから

や金融恐慌の影響を受け、依然として厳しい経営を強いられた。そんな逆風続きの状況にあって、日露戦争は起死回生となった。軍需が激増する中、軍隊用毛布の受注に努め、事業規模を拡大した。

実のところ、絵はがきを読み解く鍵は